

## キリストにおける神の恵み

井伊 肇(日立バプテスト教会 主事)

### 【エフェソの信徒への手紙 1章3～14節】

わたしたちの主イエス・キリストの父である神は、ほめたたえられますように。神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです。わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです。神はこの恵みをわたしたちの上にあふれさせ、すべての知恵と理解とを与えて、秘められた計画をわたしたちに知らせてくださいました。これは、前もってキリストにおいてお決めになった神の御心によるものです。こうして、時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられます。天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにまとめられるのです。キリストにおいてわたしたちは、御心のままにすべてのことを行われる方の御計画によって前もって定められ、約束されたものの相続者とされました。それは、以前からキリストに希望を置いていたわたしたちが、神の栄光をたたえるためです。あなたがたもまた、キリストにおいて、真理の言葉、救いをもたらす福音を聞き、そして信じて、約束された聖霊で証印を押されたのです。この聖霊は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証であり、こうして、わたしたちは贖われて神のものとなり、神の栄光をたたえることになるのです。

1)改めて、みなさんおはようございます。また川越教会の皆さんおはようございます。すでに丸山先生からお聞きのことと思いますが、コロナ感染対策として、日立教会は先週の15日から、完全ライブ礼拝にしました。

従って、今この会堂にいるのは、私と奏楽者の中込さん、と機器操作をしてくださる礼拝スタッフの乙木さん夫妻の4人と、大野さんの5人だけです。本日私が説教奉仕をするので、乙木久美子さんが司会を担当してくださっています。

そして、私たち以外の方は、殆どの方が、スマホやパソコンで、このライブ礼拝を見ながら礼拝に出席しています。

ということで、折角の合同礼拝ですので、先ほど川越教会から証しをしていただいたように、少しでも双方向になるように工夫してみました。

2)それでは、今日は「エフェソの信徒への手紙」からご一緒にみ言葉に聴いていきたいと思います。

3)「エフェソ」とは町の名前です。当時ローマ帝国の管轄にあった、アジア州の首都でありました。

ちょっと地図で見てください。

スクリーンに、(パウロの伝道旅行地図)を出す  
エフェソの町はここですね。

その当時の人口が25万～30万人くらいの大都市だったのです。日立市の人口は約17万人、川

越市は調べたら約 36 万人でしたので、少しイメージできると思います。

ローマと東洋を結ぶ海路と陸路の接点として繁栄していた大都市でした。

しかも、町の中心には、女神アルテミスを祭る豪華な神殿があり、政治や商業や宗教における重要な町であったのです。

パウロは第 2 回目と 3 回目の伝道旅行において、エフェソを訪問し、3年に亘りエフェソに滞在して伝道して、エフェソ教会とその周辺に教会が生まれたのです。(使徒 18~19 章)

さて、この手紙は、パウロが牢獄の中で書いた手紙とされています。それでは、いつ頃のことかと言いますと、他の説もあるようですが、使徒言行録 28 章にある、ローマでの軟禁状態にある時に書かれたものだと考えられているのです。ですから、パウロの生涯の晩年の頃なのです。

一方、1 章 1 節には、手紙の宛先が「エフェソ」であると書かれているのですが、いくつかの写本には、その「エフェソ」が抜けているものがあるのです。

従って、これはエフェソだけに宛てて書かれたものではなく、周辺の教会にも回覧するように書かれたものではないか、とも考えられています。

また、一般的にはパウロの直筆とされている手紙は、ローマ書やコリント書、ガラテヤ書など7つの手紙です。

そして、エフェソ書は、手紙の様式とか、使っている用語、あるいは思想が、パウロの直筆の手紙と異なるところが目立つため、パウロの弟子が、パウロの名前を使って書いたとされています。

しかし、それは偽造したのではなく、当時は、そのようなことが認められていたのです。けれども、書かれたのが、パウロの晩年の頃ならば、それまでに様々なことを経験して円熟していたと考えられるので、エフェソ書もパウロが書いたものだ、と考える人も多いと言われています。

4) そう言われると確かに、私たちが読んでも、重要な言葉を、くどいと思うほど繰り返すことで、強調しているところなど、サラサラと簡単に書いた手紙ではないことが想像できます。

そして「エフェソ教会」のことを考え、文の構成や様式に配慮しながら、信仰の中心を、相当意識して書かれたものだと感じさせます。

その辺りを、少し見てみたいと思います。次を出してください。

**スクリーンに、(エフェソ 1:3~14)を出す**

これが、今日の個所ですね。これを、ちょっと色分けしてみました。次を出してください。

**スクリーンに、(エフェソ 1:3~14)の色分けしたものを出す**

例えば「わたしたち」という言葉が 11 回出てきます。「わたしたち」とはパウロとエフェソ教会の人たちのことです。

ここから、パウロが如何にエフェソ教会の人たちのことを思っているかが伝わってきます。離れていても、私はいつもあなた方と一緒にですよ、という強い思いが読み取れます。

また「キリストにおいて」とか「御子において」という言葉も 6 回使われています。これは「キリストを信じる」あるいは「キリストに結ばれている」という意味でしょう。

祝福で満たすのも、選ぶことも、罪を赦すのも、決めることも、相続者とするのも、福音を信じて救われる証印を押すのも、すべては、キリストを通してのみ、行なわれる、ということです。

5)じつを言うと、ここで説教原稿がちょっと進まなくなってしまったのです。

その時、あっ！ そうだ、とある「古い本」のことを思い出したのです。

その本は、もう 20 年近く昔に書かれた「教会形成の喜び」という本でした。

それを書いた先生が、ある神学校で神学生向けに、話してきたものを纏めたものでした。

以前にも何度か読んだのですが、今回探し出して、また読み直してみたのです。

そうしたら、改めて『はっ！』させられたことがあったのです。

その先生は、「エフェソの信徒への手紙」の背景を、次のように解説していたのです。

その本が出る 3 年前に、今はもう廃墟となっているエペソの町に行ったことがあるそうです。

そして、使徒言行録 19 章に出て来る、あの野外劇場跡を見に行ったそうです。

アルテミス神殿の模型を銀細工で作り、参拝客に売って儲けていたデメトリオが「偉大なのはキリストではなく、エフェソのアルテミスだ」とか、何か訳のわからないことをいって、同じ仕事をしている職人たちを扇動し、暴動を起こしたのです。

そして、パウロの同行者のガイオとアリストアルコを捕えて劇場になだれ込み、もはや殺されかねない状況だった、というあの野外劇場跡でした。

先生は、そのガイドさんから、その後の物語りを聞いたそうです。

その劇場の地下には、聖書の記録には残っていない、一つの動物の檻があったそうです。それはライオンの檻でした。

エフェソ教会が発展しはじめ、ここを拠点に伝道が始まり、フィラデルフィア、ラオデキヤ、スミルナなど、黙示録に出て来る 7 つの教会が建てあげられていったと思われまふ。しかし、自分たちにとって邪魔になる、こうしたキリスト者は、初めのうちに叩いておこうと、おそらくエフェソの教会員が、見せしめにライオンの餌食になって惨殺されたのではないか、という解説だったそうです。

エフェソの町は女神アルテミスの宗教と経済、生活と信仰が一体になっている町でしたから、女神の邪魔になるものは、信仰の問題ではなく、「町の秩序を壊すもの、自分たちの生活の糧を奪うもの」となるわけです。ですから町中が大騒ぎになり、パウロたちは本当に危険な状況でした。

そして、何とか騒ぎが収まると、パウロたち一行は町を出ていったのです。

パウロたちはいいですよ。危機一髪で逃れることが出来たのですから。

しかし、そこに残された教会はどうなるのでしょうか。

指導者が奪い去られ、教会員だけが残されてしまい、彼らは叫びたかったでしょう。

「パウロ先生、ここはアンティオキア教会やエルサレム教会とは違うんです。非常に凶暴な、いつ焼き討ちにあうかも分からないような町に、私たちだけが取り残されて、どうして教会を形成していけと、言うのですか」

私も教会員だったら、そう言ってもおかしくないと思うのです。

パウロは戻って指導したいところですが、それは叶わないことでした。そこで今なら、郵便やメールですぐに届けられるところかも知れませんが、そんな時代ではありませんので、パウロは手紙を書いたのです。

『あなたがたの教会は、決して見捨てられていない』

『神様はあなたの教会に期待しているのです』

それが、この「エフェソの信徒への手紙」なのです。

ちょっと4節と5節をスクリーンに出してください。

スクリーンに、(エフェソ 1:4~5)を出す

ここに、  
あなた方の教会は大丈夫だ、神様の選びがあるのだ、根拠はある。なぜなら天地創造の前から、あなたがたは、キリストにあって選ばれているからだ。

エフェソの町の現状ばかりを見ないように。どんなに危険で、伝道が難しく、教えてくれる指導者がいなくても、この町で、いったい何の実が結べるのか、と言わないようにしなさい。

この町は、神様に愛されている、この教会に対する神様の思いは並々ならないものがある、という天から送られてくるメッセージをきちんと受け取り、なさい。それを教会の使命として伝道しなさい。エフェソ教会の信徒は、そのように読みとったのです。

このように、その先生は、神学生に、『神様は、私たちのおかれている教会に期待している』ということを確認すること。それが、教会形成のスタートです、と話されたのです。

それを読んで、私が『はっ！』させられた、のは、「手紙」には、「書き手」と「受け取り手」がいるということでした。

先ほど私は、今日の聖書箇所を少し説明しましたが、あれは「書き手」の視点に立っていたのだ、ということに気がついたのです。

勿論それも大事なのですが、エフェソ教会の教会員としての「受け取り手」の視点に立って、このエフェソ書を読むことが、疎かになっていたのではないかと気付かされたのです。

6)そして私は、「一通の手紙」を思い出しました。

私たちの教会は、1960年に初代牧師を招き、連盟の準直属伝道所としてスタートしたのです。私が日立に来る8年くらい前のことでした。しかし、なかなか教勢も伸びず、ついに、24年後の1984年に、初めての無牧師を経験することになったのです。

その時、私は37歳、仕事も忙しく、教会ということもあまりよく分かっていなかったのですが、無牧師になってから、連合の諸先生がたや、特に水戸教会から支援をいただき、何とか礼拝を守ってきました。

そして無牧師2年目の年末、今日ここにいます乙木さん夫妻が北九州へ帰省する折りに西南学院大学の神学部へ行く機会が与えられたのです。

そこで翌年2月初めに、神様の不思議な導きで、家族持ちの高木康俊神学生を、いわゆる、お見合い説教にお招きしたのです。

そして土曜、日曜と、礼拝や交わり、執事との話し合いも終わり、月曜日の朝、西南の神学部へ戻るために、日立駅でお見送りをしました。その時、高木神学生から一通の手紙を受け取ったのです。

教会にもどり、その手紙を開けてみました。

そこには高木先生の熱い思い、日立教会を愛する思いが書かれていたのです。一部紹介します。

『主の御名を賛美申し上げます。良きお交わりを感謝します。』

主イエスのお働きを感じすぎるほど、感じさせられた土曜、日曜であったと思います。皆さまの暖かいご配慮と精一杯のおもてなしが、私ども一家にとって何よりの祝福であったと思いました。

正直に申しあげまして、日立にお招き頂くまでは、他の可能性も色々考えないではありませんでした。でも、もう日立の皆様とお会いし、日立の地を示されて、他の誘いのことは全て忘れることができました。・・(中略)』

私は、涙なしには読むことができませんでした。妻と共に感謝を祈り、すぐその手紙をコピーして会員皆に配りました。その手紙は今も大事に持っています。  
こうして高木牧師と共に、第2期目を喜びを持ってスタートしたのでした。

7)「その手紙」のことを思いながら、このエフェソの手紙も、あの時の受け取り手の視点で、読む必要があると思わされたのです。

もう一度、今日の聖書箇所をスクリーンに出してください。

**スクリーンに、(エフェソ 1:3~14)の色分けしたものを出す**

3 節、霊的な祝福、即ち神様の働きによる祝福で満たして下さった。

4 節、聖なるもの、汚れのない者にしようと選んで下さった。しかもそれは天地創造の前からだというのです。

5 節、さらに神の子にしようと、これも予め定めて下さった。

7 節、御子の血、即ち十字架の血によって贖われ、罪ゆるされた者として下さった。それは私たちの信仰や行いによるのではなく、ただ神様の恵みによってである。

8-9 節、その恵みをあふれさせて、神様の秘められた計画を知らせて下さった。その計画とは、10 節のことです。

11 節、その計画において、相続者として下さった。

13 節、その保証として、聖霊で証印を押して下さった。

このようにして、わたしたちは、贖われて神のものとなり、神様の栄光をたたえることになるのです、というメッセージを受け取ったのです。

注目したいのは、今、スクリーンに出ている聖句で、赤色で示している言葉です。

すべて過去形になっている点です。将来こうなる、というのではないのです。すでに、過去において、そうになっている、というのです。

これはもう、力強い、宣言であります。

そして、全ての宣言の主語は、神様です。そしてその目的語は、エフェソの教会員です。

ここには「神様の恵み」が満ちあふれています。

エフェソ教会の教会員は、きっと、この手紙を、涙を流しながら読んだことでしょう。そして、慰められ、大いに励まされたに違いない、と思ったのです。

その「受け取り手」としての視点がなかったことに、改めて気がついたので。

だから、彼らは、他の教会にも知らせてあげなければ、と思ったことでしょう。

私がさきほど紹介した手紙をコピーして配ったように、彼らは、それを写本にして、配ったのです。

8) それでは、私たちの教会はどうでしょうか。

日立教会は、2015年4月から3度目の無牧師時代を迎えることになりました。

それは横浜 JOY 教会が、新たに主任牧師を迎え、石田先生を協力牧師として、複数牧会を始めようとしていた時でした。

丁度そのとき、私たちの支援依頼を快く受け入れてくださったのです。

石田政美牧師に、助言者となっていただき、7年目になりました。

その間、私たちは、しばらくは、専任の牧師は置かないで、信徒相互牧会による会衆教会をめざそうという総会の合意に至ったのです。

勿論、牧師は必要ありません、ということではありません。

さて、日立教会に対する「神様の恵み」はどうだったでしょうか？

無牧師となってからの出来事から、いくつかを数えてみました。

①教会の敷地にあった牧師館を築60年にもなることもあって、取り壊しました。

これによって駐車スペースが大きくなりました。

②ある会員から、土地付き自宅を売却されたあと、大口の献金をしてくださいました。

合わせて、東京バプテスト神学校にも大口の献金を捧げてくださいました。

また、別の会員からも、大口の献金をしてくださいました。

これらは、次の伝道ステージの時に、大きな励ましとなります。

③隣の町にある茨城キリスト教学園の高校生が、ドイツの短期留学中に、コロナのために帰国を余儀なくされたのですが、聖書についてもっと、学びたいと教会に来るようになりました。彼は、関西のミッション系大学に進学しましたが、今も Zoom でつながって聖書の学びを続けています。

④その大学生のおばあさんが、最初はお孫さんと一緒に礼拝に来ていたのですが、お孫さんに勧められ、今はひとりで、礼拝にきています。

⑤コロナ感染対策のなかで、今回のように、オンラインでも礼拝ができるようになりました。遠く仙台に在住している会員もライブ礼拝に参加し、神の家族の一員であることを確認しています。何よりも教会員の家族と一緒にライブ礼拝を見てくださっていることです。

また、ある会員は、高齢にも関わらず、スマホデビューしました。

今日の奏楽は、生演奏ですが、ライブ礼拝をつくりあげるため、奏楽者のご主人が奏楽演奏のデータ作りに関わってくださいました。

⑥会員のご子息で、ちょっと遠隔地ですがクリニックを開いて、地域医療に携わっているクリスチャン医師がいます。その先生の診療を受けている教会員や家族の方が沢山います。

そのことを通して、新たなネットワークが生まれています。そして、その中から、日立の礼拝に出席されるようになった方も与えられています。

今年5月には、その先生に説教をお願いし、ミニ伝道集会的な礼拝が実現しました。

⑦少ないメンバーですが、それぞれの賜物を用いて、信徒の相互牧会について段々と理解が出来ます。礼拝の司会も出来るだけ多くの会員で奉仕するようになりました。

⑧勿論、讃美歌にあるように「たとえ差し出される杯が苦くても、恐れずに感謝をこめて受ける」こともありました。伝道開始当初から、教会を支え、また奏楽奉仕をされてきた会員が引っ越しされ、またもう一人の奏楽者も、いろいろな理由から教会から離れることになり、奏楽者が3名から1名になったのです。しかし、そのことで新たなチャレンジも生まれ、奏楽奉仕の大変さが増える中で、家族への良い証しとなっています。

⑨私も、東京バプテスト神学校での学びの機会が与えられました。今は、教会主事として立たせられ、教会全体のことを見ることで、会員に安心感が与えられているのではないかと思います。また、私の神学校での学びのために、ある会員から献金も捧げられました。

その他にも、数えきれませんが、会員だけでなく、会員の家族や友人においても「神の恵み」をいただいていると思います。

そして何よりも、大きな「神の恵み」は、横浜 JOY 教会が、石田政美先生を、祈りをもって派遣してくださっていることです。

このように数えてみると、『神様は、私たちの教会に期待している』ということを実感することができます。

9)最後に、もう一度今日の聖書をご覧ください。スクリーンの文字の色分けが、はっきりしないかもしれませんが、

エフェソ教会の信徒が受け取ったと同じように、私たちも、この手紙から受けとりたいことは、それが、緑色にしたところです。

恵みは神様からだけ与えられるもの、その恵みをたたえるのが、教会の使命です。  
それが、神様の栄光をたたえることになるのです。

今日の礼拝では最初に、「主の恵み」をこの日立教会と川越教会に、生かしてくださるようにと、賛美しました。

次に、望みが消えそうなときも、主の十字架を担いきれないと感じたときにも、主の恵みは必ずある。だから、それを数えてみよう、と賛美しました。

最後に、神の恵みをたたえ、栄光をたたえるために、キリストによって、私たちは立たされています。ですから神の御言葉を伝えることが教会の使命です、と賛美したいと思います。

それでは、お祈りいたします。